



Kekkaku

結核

▼ 読みたい項目をクリックしてください

Vol. 99 No.6 September-October 2024

- 原 著** 157…… 活動性結核の診断におけるインターフェロン γ 遊離試験の偽陰性にかかわる要因の検討 ■酒井俊輔他
- 163…… 抗酸菌検査のアンケート調査 2022 における結果報告 ■吉田志緒美他
- 症例報告** 173…… 小細胞肺癌に対する化学療法施行中に発症した結核性胸膜炎の1例
■栗山満美子他
- 資 料** 179…… 新型コロナウイルス感染症のパンデミック下に発出された日本結核・非結核性抗酸菌症学会からの提言・発言を顧みて ■藤田 明他
- 委員会報告** 187…… アミカシン硫酸塩吸入用製剤 (amikacin liposome inhalation suspension: ALIS) に関する使用指針—改訂 2024
■日本結核・非結核性抗酸菌症学会非結核性抗酸菌症対策委員会
／日本呼吸器学会感染症・結核学術部会
- 会 告** 今村賞募集要項／研究奨励賞推薦書提出要項
2024年度海外留学助成金募集要項

活動性結核の診断におけるインターフェロン γ 遊離試験の偽陰性にかかわる要因の検討

¹酒井 俊輔 ¹伊藤 大貴 ¹松本 智成 ²山口 統彦

要旨：〔目的〕実臨床でしばしば経験される、インターフェロン γ 遊離試験（IGRA）偽陰性の活動性肺結核患者の背景を通して検査結果に影響を及ぼす因子を抽出し、臨床使用上のピットフォールについて検討する。〔方法〕細菌学的に活動性肺結核であると証明され、治療前にIGRAを測定した66例を対象に、活動性肺結核発病リスク要因、すなわち免疫抑制状態として年齢（80歳以上）、全身ステロイド（プレドニゾン換算10 mg/day以上）、潜在性結核感染症から活動性肺結核を発病する勧告レベルAのリスク要因、の各因子を後方視的に比較検討した。〔結果〕全身ステロイド（プレドニゾン換算10 mg/day以上）がIGRA偽陰性に影響を与える有意な因子として抽出された（ $P=0.014$ ）。〔結論〕全身ステロイド（プレドニゾン換算10 mg/day以上）を使用している者では、結核菌特異的な免疫応答が抑制されている可能性があると考えられることから、IGRAの判定においては注意が必要である。

キーワード：活動性肺結核，インターフェロン γ 遊離試験，潜在性結核感染症，偽陰性

抗酸菌検査のアンケート調査2022における結果報告

¹吉田志緒美 ²山本 剛 ³石井 良和 ⁴御手洗 聡

要旨：〔目的〕抗酸菌症における抗酸菌検査に使用される喀痰材料に対して、どのような前処理が行われているのかは明らかでない。そこで、抗酸菌検査の実態を把握すべく、全国の検査に従事されている臨床検査技師を対象にしたウェブアンケート調査を実施した。〔方法〕本アンケートは2019年1月～12月の1年間のデータを対象とした。有効回答は132施設〔病院および診療所122, 衛生検査所（検査センター）10〕で、全国40の都道府県から回答が得られた。〔結果〕喀痰材料の前処理法では、「前処理しない」という回答が29.5%と最多で、次にセミアルカリプロテアーゼ（SAP）とNALC-NaOHとの併用法（27.7%）、SAPのみ（16.2%）、NALC-NaOHのみ（10.4%）が続いた。塗抹陽性検体に占める培養陽性検体率は低く、雑菌汚染率については、固形培地・液体培地ともに、基準範囲を下回る傾向がみられた。〔結語〕本調査により、わが国における抗酸菌検査の現状を把握し、問題点や課題を明らかにすることができた。精度保証の必要性を裏付ける検査の実態が確認されたことから、課題改善に向けた取り組みが望まれる。

キーワード：抗酸菌検査, 結核菌, 非結核性抗酸菌, ウェブアンケート調査, 雑菌汚染率

小細胞肺癌に対する化学療法施行中に発症した結核性胸膜炎の1例

栗山満美子 中尾 心人 中井 將仁 平野 彩未
林 俊太郎 武田 典久 村松 秀樹

要旨：65歳男性。右肺上葉進展型小細胞肺癌に対し化学療法を行っていたが、X-1年12月に咳嗽が出現し、原発巣の増大と左胸水を認めた。小細胞肺癌の悪化と考え、化学療法を変更したが、左胸水は増加した。胸水検査で診断に至らず、局所麻酔下胸腔鏡検査で結核性胸膜炎と診断した。結核性胸膜炎に対し、抗結核薬を投与したが、肺癌の悪化と発作性上室性頻脈のコントロール不良により死亡した。小細胞肺癌に対する化学療法中に結核性胸膜炎を発症した1例を経験した。最近では、肺癌の化学療法中の結核発症が増加している。結核性胸膜炎の診断と抗結核薬との薬物相互作用の観点から教訓的症例と考えられた。

キーワード：結核性胸膜炎，小細胞肺癌，局所麻酔下胸腔鏡，薬物相互作用

新型コロナウイルス感染症のパンデミック下に 発出された日本結核・非結核性抗酸菌症学会 からの提言・発言を顧みて

¹藤田 明 ²齋藤 武文

要旨：新型コロナウイルス感染症のパンデミック下に、日本結核・非結核性抗酸菌症学会の理事長・関係委員長からの3本の提言や発言を学会ホームページ上に公開した。まず2020年4月にパンデミック初期におけるBCGの有効性をめぐる議論に関して「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）とBCGワクチンの接種に関して」を、次いで2020年6月に結核病床の転用に関して「提言：新型コロナウイルス感染症による結核医療体制への影響に鑑み」を、そして2021年1月に感染症法の改正に関して「感染症法の改正法案に関して」を発表した。その後それぞれ、臨床試験におけるBCGの有用性の否定、結核低蔓延下の結核医療体制確保に関する課題、感染症法改正後の法学者による議論、といった動きがあり、若干の考察を加えて資料としてまとめた。次のパンデミック時に結核対策の参考の一助になれば幸いである。

キーワード：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）、BCG（Bacille de Calmette-Guérin）、結核医療体制、感染症法